

全国数学教育学会 第64回研究発表会 全体会（シンポジウム）

日本の優れた数学教育の「現実」とは何か？
— 我々は、それをどう捉え、どう理論化できるのか？ —

日時	令和8年6月28日（日）10:35～12:05
会場	北海道教育大学札幌校 講堂
シンポジスト	日野圭子（宇都宮大学） 相馬一彦（北海道教育大学名誉教授） 宮川 健（早稲田大学）
司会	岩崎 浩（上越教育大学）

趣旨

日本の生徒の数学的達成度は、国際的な学力調査において一貫して上位を占めており、日本の数学教育において実際にどのような教育実践が行われているのかについて、国際社会から高い関心が寄せられている。しかしながら、当事者である日本の数学教育研究者にとって、その「優れた数学教育の現実」は日常的で自明なものとして受け止められてきた側面があり、必ずしも十分に可視化・対象化されてこなかったのではないかと。むしろ、それは見落とされてきたとさえ言えるのではなかろうか。少なくとも、日本の優れた数学教育の現実そのものを数学教育学における中核的な研究対象として捉え、その独自性や構造を理論的に解明する試みは十分とは言い難い。その結果、日本の数学教育の「現実」をどのように把握し、いかなる理論的枠組みとして構成し得るのかという点において弱さが残り、日本に固有の数学教育学の理論研究を国際的に説得力をもって発信するには至っていないのが現状であろう。

本シンポジウムでは、こうした問題意識のもと、日本の優れた数学教育の「現実」を改めて問い直し、それをどのように捉え、理論化し得るのかについて、多角的な視点から検討することを目的とする。

最近（2024年）Springerから刊行された数学教育学の国際ハンドブック『Fourth International Handbook of Mathematics Education』において、数学の成績が常に国際的に上位を占める東アジア諸国の数学教育をめぐる「神話と現実」について論じた著者の一人である日野先生に、国際的な視座から、とりわけ日本の数学教育に関する「神話と現実」をどのように捉えて国際発信されたのかについてお話いただく。続いて、相馬先生には、日本の数学教育実践が世界からどのように見られてきたのかに関する諸研究を踏まえつつ、長年にわたり問題解決型授業を中心として実践と研究の双方に携わってこられた立場から、その「現実」をどのように評価し得るのか、また、どの点において反論や修正が必要であるのかについてのご意見や、当事者の視点から見た別様の「現実」や新たな捉え方についても提起していただく。さらに宮川先生には、「日本に固有の数学教育の『現実』とは何か。それをどのように捉え、いかに理論化し得るのか」という問いに対し、日本の数学教育の「現実」を捉え、その理論化を試みて国際発信されている立場から、日本に固有の数学教育学の理論研究を今後どのように進めていくべきかについて、展望と提言を示していただく。

そして改めて、日本の優れた数学教育の「現実」とは何か、それはどのように捉えられるのか、また理論化し得るのか、さらに、日本に固有の数学教育学の研究として国際的に説得力をもって発信し、貢献するにはどのような視点や工夫が必要なのかについて、シンポジスト間で議論を深める。

最後に、フロアを交えた意見交換を通して、日本の数学教育の「現実」を理論的知として再構成し、国際的に発信可能な数学教育学の構築に向けた課題と可能性について考えたい。

タイムテーブル

10:35–10:40	趣旨説明 岩崎 浩（上越教育大学）
10:40–10:55	日本の数学の指導はどう見られ、紹介されたか — 「神話と現実：高成績のアジアの国々における数学の指導」の内容紹介— 日野圭子（宇都宮大学）
10:55–11:10	日本の優れた数学教育を支えてきた（いる）もの 相馬一彦（北海道教育大学名誉教授）
11:10–11:25	数学教育の現実の理論化 — 術と論の数学教育の相互作用を通して— 宮川 健（早稲田大学）
11:25–11:45	シンポジストによる意見交換・議論
11:45–12:05	フロアとの意見交換・議論